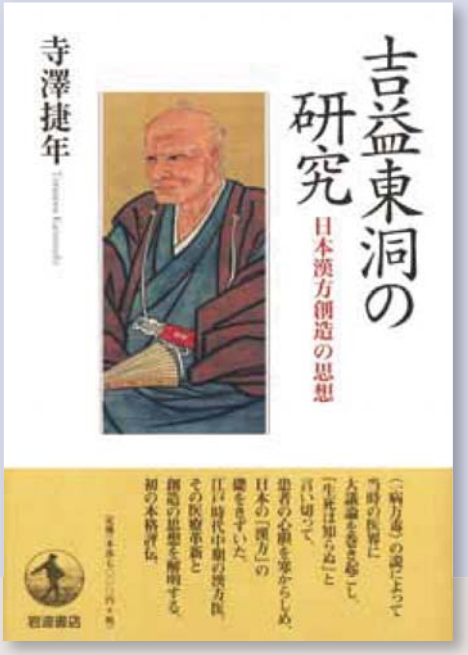
寺澤捷年 著

吉益東洞の研究
日本漢方創造の思想

文／安井廣迪



書名：吉益東洞の研究―日本漢方創造の思想
著者：寺澤 捷年
発行：岩波書店（2012年1月25日）
価格：7,350円（税込）

日本の漢方医学が中国の中医学と異なった形であるのは、江戸時代に活躍した吉益東洞（1702-1773）が、それまでの中国伝統医学の理論（現在の中医学理論）を否定したことに由来している。中国伝統医学において最も重要な部分を不要のものとする東洞の医説は、瞬く間に日本中に広がり、短い間に曲直瀬道三に始まる後世派医学は凋落していった。

このときに東洞が提唱したのは、「万病一毒説」と「方証相対による処方運用」である。明治維新を経て現在につながる漢方復興運動の過程で、日本の医家たちはこれを継承し、方証相対の医学体系を樹立してきた。

この歴史あるが故に、後世の人たちは東洞の医学の本質に迫ろうとして多くの努力を重ねた。彼に関する著作の数の多さがそれを物語っている。いずれもが力作である。にもかかわらず、東洞の医学が語りつくされたというには程遠い。

今回、寺澤捷年先生が新たに一書を物された。もちろん吉益東洞に関する書物である。

先生のこの書には、先行する諸研究を踏まえ、新たな観点から東洞の医説の本質を解き明かす試みがあふれている。先生は、東洞の生きた時代背景をふまえ、その生涯を丹念に追いかけ、一字一句おろそかにせずにその著作を読み解き、更に、40年に及ぶ臨床経験の上に立って本書を執筆された。

日本の漢方医学がなぜ現在のような形を有するのかを知ることは、漢方医学に携わる人にとって必須の事柄である。寺澤先生は、本書を通してそれらを啓示しておられる。そして、なぜ東洞がこのような学説を確立するに至ったか、更に東洞が究極の目標としたものは何であったのかについて、次のように喝破されている。それは当時の日本の「医療システム全体の変革」であった。

寺澤先生は、まさに今こそ「医療システム全体の改革」が必要と考えておられるのではなかろうか。東洞の実像を解明する試みの中からは、先生ご自身の研究姿勢が浮かび上がって来るように見える。

最後に言っておきたいことがある。この本には情熱がある。寺澤先生は、ものすごい情熱を持って本書を執筆されたに違いない。漢方医学を研究するとき、真摯な研究態度とともに、情熱こそが全ての根源であるということを、この本は教えてくれる。以て肝に銘じよう。